

うえのやなか
上野谷中
殺人事件

内田康夫

中公文庫



中公文庫

うえの やなかきつじん じけん
上野谷中殺人事件

定価はカバーに表示してあります。

1998年1月6日印刷

1998年1月18日発行

著者 うちだ やすお
内田康夫

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Yasuo Uchida

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203038-2 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

上野谷中殺人事件

内田康夫



中央公論社

目次

プロローグ

7

第一章 不忍池しのばずのいけ

10

第二章 谷中靈園やなか

42

第三章 よみせ通り

75

第四章 谷根千マガジンやねせん

113

第五章 父と娘

147

第六章 密室殺人

197

エピローグ

236

自作解説

247

DTP オフィス・トイ

上野谷中殺人事件

プロローグ

升源酒店のおやじは、暖房の効きの悪いことで、会合の最初から機嫌が悪かった。

「このビルも建て替えなきゃだめだよ」

プリプリ怒りながら、縁の欠けた階段を蹴飛ばすようにして下りた。

「だいたい、この辺りのビルは多かれ少なかれ、傷んできてますからねえ。不忍池しのはずのいけをやるついでに、いつせいに建て替えすりやいいんですよ」

時田商店の若社長も同調した。

もう一人、スギオカビルの社長は、いわく言いがたい顔で二人のあとから黙って階段を下りた。杉岡のところも、持ちビルの老朽化はかなり進んでいるのだ。

「だけど、不忍池の件は、ほんとに実現しますかねえ？」

時田は心配そうに言った。

「反対派の連中は、かなり強気で、絶対に阻止するとか言ってるみたいですけど」

「そんなもの」と、升源は喧嘩腰だ。

「われわれは切実な問題として捉えているのに、あいつらはまるで野次馬根性だぜ。てめえたちには関係ねえもんだから、勝手なことをぬかしやがる。ほんと、いまのうちに駐車場問題を片づけておかなきゃ、上野の商店街は閑古鳥が鳴いちゃうよ」

「そうですねえ」

階段を下りきって、鉄のドアを開けた。外はまだ薄明るい。街の明かりと空の明るさがちようど同じくらいに溶け合って、眠気を誘うような時刻である。

ドアを出るところに、行く手を遮るように二人の男が立っていた。顔を突き合わせるようにして、一方の男の手にある手帳を、もう一人のほうが覗き込んでいた。顔を突き合わせるようにして、一方の男の手にある手帳を、もう一人のほうの覗き込んでいた。覗き込んでいたほうは何か喋りかけたときに、三人が出て行くのに気づいて、二人同時にこっちを見て、それから慌てて場所を移動した。

ビルを出た三人はその二人とは反対の方角に歩きだした。

「おい、いまの男、熊江建設のやつじゃなかったかい？」

升源が小声で言った。

「ああ、そういえば、このあいだの説明会のときに、会場にいたような気がしますね」
時田が言い、杉岡に「どうですか？」と訊いた。

「さあ、どうかなあ、よく憶えていないんですよ」

杉岡は首をひねった。万事につけて、杉岡は言動が慎重すぎる。升源は気に食わない顔でそっぽを向いた。

「いや、たしかにいたよ。熊江建設の人間かどうかは知らねえけどさ、根回し工作に参加していることは間違いないねえな。まあ、われわれとしてはご苦労さんと言いたいところだが、あっちの連中には嫌われてるんじゃないのかねえ」

「だとすると、もう一人の若い男のほうは、あれは何ですかね？ やっぱりスパイか何かでしょうか？」

「そうかもしれないな。反対派の切り崩しを狙って、ひそかに動いているってところか」

「そうですかねえ？」

杉岡が気のない口調で言った。

「そう親密な様子には思えなかったですよ。スパイ仲間というより、むしろ、切り崩しの相手かもしれない」

「そうかね、まあ、どっちでもいいけどさ」

升源は煩うるさそうに手を振って、「じゃあ、また」と、自分の店へ行く路地を曲がって行った。

第一章 不忍池しのばずのいけ

1

須美子が「軽井沢のセンセから電話です」と呼びに来た。軽井沢からの電話となると、相変わらず突慳貪つっけんどんな口調である。「センセイ」と言わず、「センセ」と軽く言うのには、多少の軽侮の感情が込められている。

「ねえ須美ちゃん、そのセンセというのはやめたほうがいいと思うよ」

浅見は遠慮がちに言う。須美子は「はい」と返事だけはいいが、たぶん今後も直らないだろう。以前から何度も注意を促しているのだが、いつまで経ってもあらためる様子がない。困ったものだ。

もつとも、須美子が——いや、須美子にかぎらず、浅見家の人間のほとんどが、軽井沢

の内田康夫という作家に対して、あまり好ましい印象を抱いていないことは、浅見もよく承知していた。

浅見光彦が現在の職業——ルポライターになる切っ掛けを造ったのは内田である。その意味からいうと、いくばくなくなりとも恩義は感じないわけにいかないのだが、内田は浅見が関わった事件のことを、片っ端から材料にして、推理小説に書いてしまう。まるで、そうすることが目的で、浅見をルポライターに仕立て上げたとも受け取れるほどだ。

いくなれば、人のフンドシで相撲すもうを取るのココロだ。それがまず、浅見家の人々には不愉快きわまる。

そこへもってきて、内田は事件の内容を歪曲わいきよくし、脚色し、興味本位の読物にしてしまう。浅見光彦はもちろんのこと、母親の雪江未亡人や須美子まで本名で登場させるので、世間体が悪くてしようがない。いちど、名前を使われ、モデルにされた女性から抗議の手紙をもらったと、悄気しよげていたことがあつたけれど、内田の場合、そういう反省はほんの一過性で、すぐに立ち直る、性懲りもないところがある。

「ちよつと頼みたいことがあるのだけど」

浅見が電話に出ると、内田は開口一番、神妙な声で言った。いつもの調子のよさとは、少し様子が違う。

「妙な手紙をもらってね」

「またですか」

浅見は（それ見たことか——）と思った。

「ん？ また、とはどういう意味だい？」

「え？ あ、いや、またファンレターをもらったのですか、という意味ですよ」

「ああ、ははは、そういうことか。いや、ファンレターもあったけどね……そうそう、このあいだは、女性ファンから誕生日のプレゼントをもらったよ。しかし、どうして僕の誕生日を知っているのかなあ？……」

（何をとぼけたこと言ってるのさ——）

浅見は呆れた。あき内田は『琥珀アンバーロードの道殺人事件』という本の中で、ちやつかり誕生日のことを書いているのだ。「もしかすると、どこかの美人がプレゼントをくれるかもしれないからね」などと、さもしいことを言っていたくせに。

それにしても、プレゼントをくれる女性は美人だと決めつける身勝手さは、いかにも内田らしい。

「今回のファンレターじゃないのだ」

内田は真面目まじめな口調に戻って、言った。

「それに、手紙は一応、僕宛てになつてはいるが、実際の宛先はきみなのだよ」

「僕に、ですか？」

「ああ、そうだ、きみへの依頼と言つてもいい」

「依頼……というと、どこかへ取材に行つてくれとか、そういつたたぐいの原稿依頼ですか？」

「冗談言つちやいけない、原稿依頼をきみになんか回すわけがないだろう。そうでなくても、目下のところ、家を新築してローンに四苦八苦しているのだからね。そうじゃなくて、事件だよ、事件」

「事件？……まさか、何かの事件の依頼、という意味じゃないでしょうね」

「いや、そのままさかだよ。きみに事件を調べてほしいと言つている」

「だめですよ、そんなの。僕は探偵業じゃないって言つてるでしょう」

「しかし、世間はそう思っている」

「それは内田さんが変なものを書くからじゃありませんか」

「変なものはないだろう。僕の作品が概して評判がいいのは、きみだって知っているじゃないか。そりゃ、ヘツポコ探偵をあたかも名探偵であるかのごとく、美化して書く虚構があることは認めるけどさ。それはともかく、きみの性格としては、頼まれていやとは言え

ないだろう」

「いえ、言えますよ、いくらでも。いやなものはいやです」

「ははは、無理しなくてもいい。きみの本心はみえみえなのだ」

「無理なんかしていませんよ、本心からいやだと言っているのです」

「ははあ……」

内田は笑いを含んだ声で言った。

「そばにあの須美子嬢か、恐怖のおふくろさんがいるね」

「え？ いや、誰もいませんよ」

浅見は慌てて否定したが、内田の慧眼けいがんには驚いた。事実、すぐ目の前に、須美子の片付けものをする姿があった。大して急ぎでもないのに、須美子が時間をかけて片付けものをしているのは、大切な坊ちやまを、変なセンセに誘惑あそびされないように、監視するためである。だいたい、いまどき、家に電話が一本しかないのはおかしいのだ。浅見家では主あるじである陽一郎の書斎に警察庁と結ぶための専用電話があるほかは、コードレスフォンはもちろん、親子電話すら設置していない。電話のたびにいちいちリビングルームに出て、須美子や母親の監視の中で話さなければならぬのは、じつにやりにくいのだが、居候の身分としては、文句を言えた義理ではないのだ。

「まあいいさ、深く追及する気はないよ。そういうわけだから、とにかく、その手紙をファックスで送るから、すぐに仕事にかかってもらいたい」

内田は言うだけのことを言うと、「じゃあ」と電話を切った。

仕方がないので、電話をファックスに切り換えておくと、まもなく受信装置が動きだした。

手紙をそのまま送っているらしい。インクがブルーなのか、あまり鮮明な文字ではなかった。それに文章も拙ますい。どうやら日頃、文章を書く機会のない人物のようだ。

手紙は便箋びんせん三枚分、その要旨は以下のようなものであった。

私は寺山孝次という岩手県出身の二十六歳になる男です。現在、東京の大手の建設会社の孫請けの会社に雇われて、東北新幹線の地下工事現場で働いています。

四日前のことです。突然、刑事が私の住んでいるアパートに来て、警察に連れて行かれました。先月の二十五日の晩、どこにいたかと尋ねるのです。私はその日は給料日だから、岩手にいる母親のところへ送金して、早く帰って寝たと言いました。

しかし、警察は私の言葉を信用しないみたいでした。刑事の一人は「嘘をつけ」と言うのです。どうして嘘なのかと訊くと、その日の夜中の十二時ごろ、不忍池の近くで人を殺